

可愛い女装男子を男の娘に墮とすまで



可愛い女装男子を男の娘に堕とすまで



002

キャラ紹介

主人公 大地たいち

両親の仕事の都合で高校入学時と同時に引っ越しをしたが、両親は海外へ出張しなければならなくなり、実質一人暮らしで高校生活を過ごしている。その隣の家に住んでいる『雫』とは良い友人関係を気づいている。

ヒロイン 雫しずく

大地の隣に住む女装が趣味な高校生。身体の肉付きも顔立ちも男とは思えないほど綺麗だが、ただの女装男子だ。家族間でも一人暮らしになっている大地の面倒を見ているが、雫は大地とは親友以上、恋人未満の関係だと思っている。

目次

準備万全	004
勃ちっ放し	027
帰りの電車	048
仕返しフェラ	065
男の娘と本気セックス	078
あとがき	

※試読版では『勃ちっ放し』の一部を読むことが出来ます

勃ちっ放し

荷物で下半身の前面を隠し、不自然な歩き方で通路を歩いていくしずくの後ろを付いて行く。

「ね、ねえ。恥ずかしいから別々で……」

「何を恥ずかしがることがあるんだ？ 別に一緒に行けばいいだろ」

「……えっと……そのさ……」

「別に女装の時に一緒にトイレ行ったこともあるだろ」

「そ、そうだけどさ……でも今日は違って……」

「なんか知らないけど、まあ気にすんなって」

「だ、だから！」

雫の言いたいことはこちらが仕掛けた事で丸わかりだが、わざと気づかないふりをしてゴリ押していく。

そうこうしているうちに近くのトイレに着いたが、雫は通り過ぎようとしていた。

「雫、俺もいるからこっちでいいだろ」

「いや、だからそうじゃなくてさ」

「らしくないな。恥ずかしがるなって」

雫の肩に手を回し、トイレの方へと無理やり連れ込む。

雫も抵抗しようにも、荷物で前を隠そうとしたり、周りの目を気にして静かに付いてきてくれた。

「じゃあ、僕は個室に入ってるから大地は外で待ってて」

俺を外に出そうとする雫も押し込みながら俺もその個室に入り内側から鍵を掛けた。

「——どうしたの大地！ 大地もなんかおかしいって」

「そうか？ 雫もおかしいけどな」

「ぼ、僕はいつも通りだよ」

「そんな勃起させといてか？」

雫の短パンには勃起したペニスの形がくつきりと浮き出していた。

「ぼっ……た、大地……これは」

その膨らんだペニスを隠すように雫は腰を引いた。

俺はそのまま雫を壁まで追いやって、女性のようにすべすべの太腿を撫でまわす。ニーハイ上で指先を滑らせると雫の身体は力み、地肌の上まで行くとビクビクつと身体を震わせ、短パンの裾から股の方へ忍ばせるとガクツと膝の力が一瞬抜けた。「大地……止めて……おかしいよ……」

雫の呼吸は浅くなり、太腿を撫でる手の手首を掴んでカづく止めようとすが、ビクビクと震え、気持ちよさを求める身体では力が入らず、強精剤の効果も効いて色欲も増幅されている。

抵抗したいと頭では思っても、手首を掴んでいる手も掴んだり離したりと葛藤していた。

その理性を保つために呼吸を整えようとしている中に、苦しそうな声も漏らしていた。

「こんな時でも女みたいな声出すんだな」

「やめ……たいち……」

「……」

……試したいことは正直試せた。

襲った時の表情も恐怖に怯えるわけではなく、刺激を欲している物悲しそうなト

ロンとした目つきでありながら、抵抗しなければと眉を上げる。

暖かい吐息が漏れる柔らかそうなぷっくりとした唇は小さく開き俺の名前を呼んで止めて欲しいと言いつける。

名前を呼ばれる度に、もっと攻め続けたいという欲望が沸々と湧き上がっていく。強精剤とアルコールが思っていた以上に効いてしまった事もあり、雫が落ち着くまでに時間もかかりそうで、最後まで攻め立てることにした。

「たいち……そんな、駄目だってば……」

「声がエロすぎ」

「……そんな、事ないから……」

雫の膨らんだペニスには触れないように太腿の付け根を指でなぞり、シャツの下から手を忍ばせる。

横腹に手を添え、脇の下あたりまで手を滑らせ胸の縁を沿うように人差し指の指先で撫でて、親指で肋骨の上を撫でて横腹に戻る。

それを繰り返し返していると雫は目を細め身体をくねくねと動かし始めた。

「なんで……そこばかり……」

「いつも生意気に煽るから本気にして、気持ちよくさせてあげただけだ」

「ぼくはッあ……そんなつもりで……」

「知ってる。知っててやってるから安心しろ」

「あ……安心、出来ない……よ」

ペニスに触れられない、いじらしい時間がただ過ぎていく。

くねくねとうねる中、身体を反らすタイミングで白いシャツから小さくぶつくりと乳首が勃起しているのが見えた。

「こっちだけじゃなくて乳首勃起させて、こっちの方が好きだったりする？」

「勃ってなんか……あッ」

脇腹を撫でる手から逃げるように身体を横にうねらせたときに乳首とシャツが擦れ、艶やかな小さい声を漏らしていた。

「乳首気持ちいいか？」

「っ……」

服で乳首が擦れていても、乳首には触らずシャツから手を出して次は首筋を撫でます。

首筋から唇へ、唇から首筋へと指を滑らせながらいたるところを触っていく。

そうするとアルコールのせいか雫は寂しそうな顔で舌を伸ばしキスを求めてきて、

それには応えず伸ばす舌を親指と人差し指で抓むと、んあー。っと呻き面白い。
ついに短パンの上からペニスを指先でなぞる。

「んッ……あめ……」

舌を引っ張っている指にぬるく湿った息が掛かる。

その息がとてつもないやらしさを放ち、俺まで勃起し始めてしまった。

雫は涙目で苦しそうに寂しそうな表情を浮かべ、ただ快感を求めるような声をトイレの中で響かせる。

やればやるほど、すべすべで綺麗な肌に、トーンの上があった甘い声で、ペニスを撫でていても女相手に行っているようにしか見えなくなってきた。

開きっぱなしの口のはずが乾燥もせず、それどころかトロトロの唾液までも垂らしてエサを我慢させられている犬のようだ。

「雫、かわいいよ」

「え——っあ……んあ」

下から手を放し首に片手を添えながら、口を近づける。

舌を絡ませたがる雫の期待には応えず、唇と唇を軽く重ねるだけ重ねて一度離れる。

「たい、ち……僕、変なスイッチ……入っちゃった………もっと」

この小さいキスが理性を薄れさせ、トイレの個室で快感を求め始めた。

そして改めて唇を重ねると、外で足音が近づいてきていた。

喋り声はないが、男性用便器の前で止まった気配があるが、構わずそのままキスを続ける。

雫は外に人が来た事で、再び止めなきゃいけないという感情へ切り替わってしまっただけ。

それでも止めることは無く、雫の要望通り舌を忍ばせ舌で唇を軽く撫でてゆっくり中に忍ばせていく。

トロトロの唾液が絡み合いながら、呼吸が一気に乱れていき二人息を合わせながら音を殺し呼吸を整え、また舌を絡ませる。

片手を背中に回し、もう片手をシャツの上から指先を乳首の周りをクルクルと回す。

ギリギリと迫りくるもどかしさに雫は声が漏れそうになるが、口でしっかりと押さえて外に居るであろう人にバレないようにする。

親指と人差し指で乳首を外側から抓むように近づけ触れそうになったら手を離す。両乳首をずっと焦らし続け、身体をずっとビクビクとさせて音を殺してする呼吸も限界が近づいたとき、外ではシッパを閉める音が聞こえた。

後は水道の音が聞こえて足音が遠のけば、それで問題は解決されるだけだったが、ふと下を覗くと、短パンには雫の我慢汁が滲んでシミが出来ていた。

乳首の焦らしから短パンの上からカウパーを使って指先でペニスを撫でる。

雫はガクガクと足を震わせ身体を振り快感を逃がそうとするが、俺はどれだけ腰を引いても逃がそうとはせずシミのできている所を指先で撫で続けていく。

その間に水道の音が聞こえ、ペーパーを取る音からカラカラと音を立てゴミ箱に捨てられた。

後は耳を澄ませて足音が遠のいていく事を確認して雫から一度離れる。

「……………ばか……………」

「気持ちよかったか？」

「……………」

ずっと焦らされてばかりで、唯一触られたペニスもデニム生地短パン越して決定的な刺激ではなかったはずだ。

雫はそのもどかしさから、自分で触ろうとしているが俺の目の前でどうにかその気持ちも押さえつけようと必死でシャツの襟をグツと握りしめている。

何もしない時間で落ち着くことは無く、その時間さえも焦らしとなって頭の中はエッチな気分で染まっていた。

その焦らされ続けた興奮を止める方法は無く、公共のトイレの個室ではあるが、ここまで焦らされてしまったらイってしまわないと外に出る事さえもう困難だろう。

「そ、外……に……行つて、もう、満足……だろ」

「まだ満足はしてないけど」

後は一人で致して仕舞おうという雫を逃がすつもりはない。

「……なんで……」

「別に我慢せずに今、自分でやっても良いんだぞ」

「――」
親友とまで言えるだろう関係の俺の前で自慰を促される雫は、心の中で激しく葛藤していた。

いくら先ほどまで唇を重ね合い、弄られて、アルコールや強精剤、人が来た緊迫感によって滾たぎっていた性欲に従っていたが、改めて向き合い言葉を交わすことに

よって、少しの冷静さが羞恥を取り戻しこれがまたスパイスとなっていく。

「さ、触って……いいから……」

「俺は見たい気分なんだけどな」

「ふざけ、ないで……」

「じゃあいいよ？ 薬とかの効果切れるまでずっとこうして見ててあげるから」

「なんで……そんな、意地悪ばっか……」

「だから言っただろ？ いつもの茶化しの仕返しだ」

「ッ——……」

雫も納得は出来て無い様子だったが、今の立場で自身が何を言っても不利だと理解して、性欲に従うことにしようだ。

短パンを脱いで、黒色のぴちつとしたボクサーパンツにも綺麗なシミが着いていて、それに気づき恥ずかしかったのか手でサツと隠してしまった。

「短パンにも我慢汁ついてたんだからそりやそうだろう」

「う、うる、さい……」

パンツをゆっくりずらすと小指程の長さをしている固く勃起したペニスの先から、パンツに透明な糸がやらしく引いている。

思い切ってパンツを脱げばよかったものを恐る恐る脱ぐせいで、余計にエッチな状況を生み出す。

その小さなペニスは上を向いてビンビンに反り立っていた。

上に着ていた紫のショートニットカーディガンを脱ぎ、冷たい壁にピタッと背中を付け細く綺麗な手で自身のペニスを上下にゆくと動かし始める。

ペニスを扱しいていない左手で、服の上から自身の乳首を爪の先でカリカリと弾き始めた。

乳首を触った瞬間に身体をビクツと跳ねさせ気持ちよさそうな表情がトロッと溶け出す。俺の表情を見た瞬間にすっと寂しそうに目を細めて表情に極力出ないように力を入れている。

声を殺すだけでなく、表情を見られる事を意識して快感に浸りにくい中でも、その手を止める仕草は見せなかった。

頭がほわほわする感覚が襲い情けない表情に涙が溜まっていく。

すぐにペニスを上下に扱くスピードは早くなり、呼吸も短く乱れ始めたところであの扱く腕と乳首を弄る手を掴んで無理やり自慰をとめさせた。

「た、たいち……だめッ——おねがい……ヤダッ——」

可愛い女装男子を男の娘に墮とすまで

試読版はここまでとなります。
続きは製品版をご購入の上、お楽しみください。

この作品、パーツの転載、複製、配布を禁止します。
サークル青。 トウエスイ